

イギリスでは十七世紀の科学革命と並行して自然神学が隆盛する。国内で宗派・党派が激しく対立するなか、神の啓示ではなく人間が共有する理性と経験に訴えかけることで宗派が異なろうとも広く共有されうる信仰が目指されたのである。この自然神学は十九世紀中葉まで続くイギリスの知的伝統となったが、その核たる議論は、自然界の精巧なデザインからそれを設計した創造主たる神の存在を導く「デザイン論証 (design argument, argument from design)」であった。

ヒューム (David Hume, 1711-1776) は『人間知性探求』(1748)の第十一節、またこれを発展させた『自然宗教に関する対話』(1779)においてデザイン論証を痛烈に批判した。ヒュームはさまざまな形での批判を行っているが、例えばその一つでは、デザイン論証の論理構造をアナロジーと分析した上で、類比されているもの同士が弱い類似しか持たないがゆえにデザイン論証の蓋然性は低いと指摘する。このようなヒュームの批判は、はたしてデザイン論証に致命傷を与えることに成功したのかどうか長らく論じられてきたが、近年この論争は生物学の哲学と統計学の哲学を専門とするアメリカの哲学者エリオット・ソーバー (Elliot Sober, 1948-) によって新たな展開を見せている。ソーバーは、ペイリー (William Paley, 1743-1805) の『自然神学』(1802) を例に取りながら、デザイン論証を「最善の説明への推論 (inference to the best explanation)」(すなわちパースの言うところのアブダクション) と分析する。そして、ヒュームによる分析の誤りと、ヒュームがデザイン論証に替わる対案を用意できていない不備を指摘している (ソーバー自身の立場は、尤度原理 (Likelihood Principle) を用いて、デザイン論証ないしはその後継たるインテリジェント・デザイン仮説よりも進化論が優ると示そうとするものである)。だがはたしてソーバーの指摘は正鵠を射ているであろうか。これが本発表の問題意識である。

この問題を本発表では大きく二つの観点から検討する。一つ目は、ヒューム以前のデザイン論証をアブダクションと分析することは可能であるかという点である。というのも、ペイリーの『自然神学』はヒュームの死後出版されたものであり、これを持ち出してヒュームを批判するのは思想史研究としてフェアではない。そこで、本発表ではジョン・レイの『神の叡智』(1691) を取り上げ、そこに見られるデザイン論証の論理構造を確認する。この書は日本であまり知られていないが、「自然神学書の最高峰」とも謳われ、ペイリーやリンネにも大きな影響を与えており、本来もっと注意を向けられてしかるべきものである。二つ目は、仮にデザイン論証がアブダクションだとして、はたしてヒュームによる批判はすべて無効になってしまうのかという点である。先にも述べたように、ヒュームはアナロジーにおける類似の程度の強弱にだけ頼ってデザイン論証を批判しているのではない。『自然宗教に関する対話』を中心にヒュームの議論を改めて検討し、その有効射程を探ってみたい。

以上により、ソーバーによる指摘を受けてもなお、ヒュームによるデザイン論証批判は思想的にも哲学的にも十分検討に値するものだということが示されるであろう。